

【校長室の窓】 R 2年12月

ベートーヴェン生誕250周年に寄せて

川棚高等学校長 畑野 公昭

「ジャジャジャジャー ジャジャジャジャー」と書くだけで、ああこれはベートーヴェンの交響曲第5番「運命」の出だしだな…と思う人も多いでしょう。日本人でさえ、知らない人はいないほど有名なベートーヴェン。2020年は、そのベートーヴェンの生誕250周年に当たります。世界各地で記念のコンサートやイベント、特集番組が催され、ベートーヴェンの音楽の価値や生き様などが再認識されました。毎週金曜日に設定されている「コラムらんだむ」（様々な文章を読んで感想を書く本校の取組）12月11日版でも、ベートーヴェンについての文章が取り上げられていました。

その文章では、ベートーヴェンが26歳の頃、耳の病にかかり、聴力を完全に失いながらも交響曲1番から9番までを完成させたこと。日本でも毎年の年末に演奏される「第九」で、シラーの「歓喜に寄す」という詩により、人類が一つになる喜びが高らかに歌い上げられていること。ベートーヴェンが自由で同胞愛を抱く人間社会の到来を信じ、“苦悩を突き抜けて歓喜を勝ち取る”姿勢を貫いていたことなどが紹介されていました。皆さんはどういうことを考えたでしょうか。

世界を見渡すと、ベートーヴェンが描いた理想は、まだまだ遠いようです。経済格差や様々な対立から生じる分断や紛争、各国に強まる自己主張的な動き、新型コロナウイルスの世界的蔓延による地域間・国際間の交流の停滞などが横たわっています。現状では、少し前まで希望の光を放っていた「グローバル化」という言葉の「影」の部分がむしろ色濃く表れているといえるのでしょうか。しかし、大きな戦争の記憶を風化させてはならない私たちが志向する世界は、やはり世界各地の人々や国々が、それぞれの文化や価値観を尊重し合い、誰もが物質的・精神的に満たされ、不毛な争いのない、友好的で平和的な世界であるはずです。

ただ、理想は高ければ高いほど、その道のりは険しく困難であり、今はまさに「苦悩」の時期なのでしょう。大切なことは、その苦悩を「乗り越える」ための強い意志とたゆみない行動が必要とされているということです。日頃の学習や生活ではあまり意識しない高い視点から、われわれ人類がなすべきことを考え、その中で自分ができることは何かを考えてはどうでしょうか。また、同時に、それぞれ生徒の皆さんが抱く夢を叶える上での通過点に重ね合わせることもできると思います。

高校生活は誰もがその途上にあると思いますが、特にいま大学入試共通テストを目前に控えた3年生の皆さんは、まさにその試練の渦中であって、ベートーヴェンのごとく、日々今日の自分を乗り越え理想を実現するため、ひたむきに受験準備に取り組んでいると思います。今はただ、その苦難を乗り越えようと真摯に頑張る姿を、声高らかに応援するばかりです。